

## 味の対照言語調査—中国語、プイ語、日本語と食文化

本発表では、言語への文化・環境の反映を観察する試みとして、味覚表現調査の結果を報告する。味を表す表現は、その土地で何が食べられているかに依存する。食は、気候・土壤に拠って決まる植生や動物の生態系、農耕技術、宗教や社会形態などさまざまな環境を反映して成り立っている。現代標準日本語と比較すると英語では「からい」を表す語彙が、名詞からの派生の **spicy** か、温度からの転用の **hot** しかない。「しぶい」は「にがい」**bitter** に集約され（「しぶい」の訳語に **astringent** があるが一般的な語でない）、基本的な味としては **sweet, salty, bitter, sour** の4つが考えられている。神経生理学ではレセプターとの対応関係からこの4つにうま味を加えた基本の味としており、これらはどの言語でも観察されるとしている。（Senft et al. 2007）その先のバリエーションこそが本発表の対象である。日本語より味覚カテゴリーが詳細な言語としては、たとえばタイ語には渋味を表現する語彙が四種類もあり、さらには「クリーミー」や「脂っこい」「味が無い」までが形容詞として語彙化され使われており、意味拡張もあることが報告されている（佐藤 2000）。

ここでは、中国語貴州方言とプイ語の味覚語彙収集とその対義語関係、意味拡張についての聞き取り調査の報告と、日本語との比較を行う。

味が定着していればこそ、慣用的意味拡張があると考えられる。また、日本語の「戸が渋い」の、「渋い」は〈滑らないさま〉の意味であるが、これは渋いものを食べたときの口の中のざらつきに意味拡張の身体的動機付けが予測される。しかし、日本の若年層は渋柿のような渋いものを食べる頻度が一世代前に比べ激減していることや、引き戸のある家に住んでいる人口も減ったため、この用法は廃れつつある。

プイ語は、大部分が中国南西部の貴州省に住む少数民族プイ族の言語で、タイ・カダイ語族に属する。現在、他の少数民族と同様、中国語とのバイリンガルの割合が高く、プイ語を第一言語とする話者は減少の一途を辿っている。中国語からの借用語彙も多く、とくに概念的意味を表す語は中国語からの借用語の割合がかなり高い。「味」という上位カテゴリーもプイ語には観察されなかった。近年では中年以下はほぼ中国語を理解でき、しゃべることもできるため、調査にはしばしば中国語も併用した。

結論として、味覚形容詞とその意味拡張がそれぞれの食文化を反映し、各々異なっていることを示し、味ことばの調査の意義を主張する。

### [参考文献]

Backhouse, A. E. 1994. The lexical field of taste: A semantic study of Japanese taste terms

佐藤博文 2000. 「タイ語における感覚形容詞のメタファー的拡張」、天理大学学報 195: 1-37.

Senft, Gunter, Asifa Majid & Stephen C. Levinson. 2007. The language of taste. In Asifa Majid (ed.), *Field Manual Volume 10*, 42-45. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics.